特集・横浜論 ❶

座談会　横浜学を考える

加藤祐三・佐藤東洋麿・鈴木　隆・平野　実・中村　實

一――なぜ横浜に取り組み始めたか

中村　今日はお忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。

私が司会ということでございますが、それぞれの立場でいろいろなことをお考えになり、また著作を発表していらっしゃる方々とご一緒に「横浜学を考える」ということでお話を進めさせていただきたいと思います。限られた時間ですから、皆様方がふだん力を入れていらっしゃることについて、すべてご披歴いただくというわけにはいかないかもしれませんが、精いっぱいご発言していただこうと考えております。

今日の主題は「横浜学」というものが、どういうふうに構築されるだろうかということです。それにはユニークな都市論といったような視点から横浜を考えたらいいのか、あるいは市民学的な形から横浜という都市を考えるのか、いろいろなアプローチの仕方があろうかと思います。今日はそれぞれいろいろなお立場の方、加藤先生、佐藤先生のような教鞭をお取りになっていらっしゃって、同時に研究に携わっていられる方と、鈴木さん、平野さんのように実務にお就きになりながら横浜を考えていられる方――私も後者の方の仲間に入れさせていただくわけですが、いろいろなお立場から主題をめぐって、お話を伺っていきたいと思います。

さまざまな切り口があろうかと考えますが、「なぜ横浜または横浜学に取り組み始めたのか」というところあたりからお話をいただくと、

座談会出席者

加藤祐三〈横浜市立大学教授・講座「横浜学事始」〉
佐藤東洋麿〈横浜国立大学教授・講座「横浜」前世話人〉
鈴木　隆〈(株)タングラム代表取締役・横浜学を考える会事務局長〉
平野　実〈(株)有隣堂出版課長〉
司会・中村　實〈(財)はまぎん産業文化振興財団事務局長〉

議論が進めやすいのではないでしょうか。

たまたま、お並びの順序でございますので、加藤先生から、お願い致します。

比較でなく、関係の中で「横浜学」を

加藤　もともと歴史といいましょうか、東洋史、特に中国近代史をずっとやってきました。そこから、つまり外から日本を見ると、どうも今までの日本人の日本史の理解はおかしいのではないかと思い始め、少しずつ日本近代史の方にも関心をもつようになりました。一国史では分からないことが多く、特に近代以降は世界史の時代ですから、日本史を考えるときにも、世界史の側から見る視点が同時に不可欠ではないかと思っていたからです。特に開国時期の状態は現在に随分影響しているのに、開国の理解が、どうも教科書を始めひどく偏っているという気がしていました。ある作家は「ペリーによって日本は強姦された」という言い方をしていますが、それは本当だろうかというのが、日本近代史に移っていったきっかけです。開国絡みのことですから横浜が舞台になります。

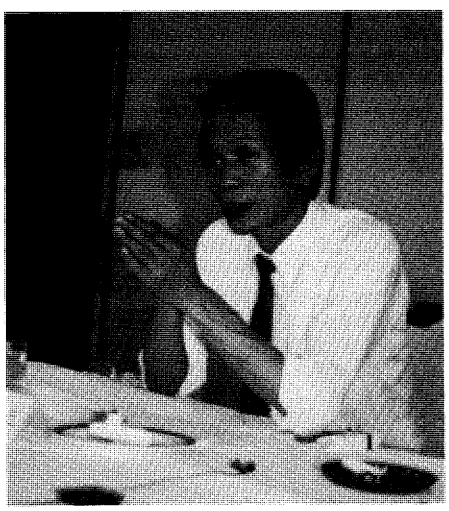
したがって、ある意味では、横浜ではなくてもよかったわけです。この強姦説ほどではないにしても、文明開化の窓口としての横浜という言い方が、よく今もってされていて、これも私は大変気になるのです。気になるのだけれども、それでは、どういう解答があるかといいますと難しい。そういったことを幾つか今もなお考えている。と、まあこういうことが、大まかにいうと、私が横浜に関心を持った学問的なきっかけです。

外から見る日本、内から見る日本というのは、視点であるとともに、方法論の問題ではないでしょうか。例えばペリーが来て条約を結んだということ一つ取り上げても、少なくとも日本側からだけ見ては分からないわけです。両者の関係ですから、お互いの資料を突き合わせる必要がある。そうやって見てみますと、やはり随分と今までの理解はおかしいと気付く。つまり「関係」という一つのかぎが、ありそうだと考えたわけです。

それから方法論の第二は、よく使われる比較するというやり方です。例えば、都市としての規模だとか、人口だとかを、五港開港場と現在の五つの姿を比べてみると、この百数十年の間に浮沈があったとか、そういう一種の比較都市論みたいな枠組みであってもいい。かなりの方が潜在的にそういうものを持っているので、僕らの役割としては、それをできるだけ一つの体系とまでいかないまでも、考えていく方に重点を置いてみたい。

そうすると、横浜学というのは、横浜というのが確かに一つの対象としてあるわけです。それが都市としてある場合、もちろん歴史としてある場合、個人としてある場合、地域としてある場合、市民運動としてある場合、いろいろな対象でいいのだけれども、横浜という対象がある限り「学」があっていいという立場です。

誤解していただきたくはないが私の「横浜学」の方法は京都の大学の人たちが始めた「サル学」のイメージなのです。サルというのは人間ではないから、あくまで観察の対象なのだ、したがって観察する主体（人間）の絶対性を疑わない態度を今までずっと続けてきた。「サル学」はその方法論をひっくり返したわけです。つまり観察するために一緒に住んでみる、一緒に行動し



てみる。そうすると、相手も反応が変わってくる。つまり「関係」の要素なのですね。

これに対して、比較というのは、一方は見る側で、一方は見られる側という、かなりはっきりした区別を前提にしています。比較する側つまり観察の主体を疑わない。疑わないで済む。観察の対象を二つ三つと増やしていき、「正確な」データを得さえすれば客観性が出てくると信じて疑わない。それも一つの方法論かもしれませんが、それだけでは困る。逆に、自分のほうを疑い、自分の思い込みや既成概念を壊して、そのことによって何らかの新たな問題点に気付く。この方法を意図的に考えないといけないと思います。特にこれからの時代は、その種の思考訓練が大切になっていくと思います。お互いの関係の中で一つ体系をつくってみようということです。私にはそのイメージがかなり強くありまして、その方法を横浜学とか、地域の名前をつけた学にも、少しずつ、どこかで導入したいと思っています。まだこれといった体系がない若い学問ですし、誰でもが参加できる分野ですから。そうなると、お互いのネットワークはかなり意味がありそうだなと思います。

中村　なるほど。興味深いお話をありがとうございました。

横浜で楽しい生活をするために

中村　佐藤先生、お願いします。

佐藤　横浜に取り組み始めたきっかけは三つあります。一つは、「八十日間世界一周」という十九世紀のSF、ジュールベルヌという作家の作品ですが、これを見ますと一八七二年の秋に、登場人物の一人が横浜をぶらつく場面があります。それで、幕末、明治の初めの頃、こんな場面が出てくるのだなということをおもしろく感じたのが一つです。

二番目には、私が、横浜のフランス語とか、東西文化交流論とかいう授業を持ちますので、参考書を見ていたのですが、幕末にフランス人のメルメ・カションが来まして、フランス語の「横浜仏語伝習所」をつくったという話を学生に伝えたことがございます。これが二つ目です。三番目が一番大きな動機です。自分の住んでいる地域の住民活動に参加しているうちに、やはり市民の人間関係というのは、それぞれの専門とか、それぞれの職場に閉じこもっていたのでは、うまくいかないのではないかという思いを強くしました。例えば、町内会の幹事みたいなものを十年間とか、あるいは広報づくりだとか、いろいろなことをやってきた過程で、「私は何々の専門家だから、隣近所、あるいは自分の住んでいる場所とは無縁だ」という考えでは、もう楽しい生活ができないのではないか。その「楽しい生活」というところが一番大事で、別に何か非常に貴重なこととか、そういう大きなことは言いませんけど、市民生活の楽しさというのはそういうところから風穴があけられるのではないかと感じたわけです。そこに私の動機があります。

中村　佐藤先生が横浜にお住まいになったのは、いつごろからですか。

佐藤　もう二十年ほど前から横浜市民です。

中村　それ以前は……

佐藤　それ以前は逗子とか、鎌倉とか、神奈川県です。小学校は逗子で、中学は鎌倉、居住地はずっと神奈川県です。

中村　「八十日間世界一周」を最初にお読みになったのは、いつですか。

佐藤　もう十年以上前になります。ただ、今までは娯楽小説だということで、すっかり忘れていましたが、あるときまた目に触れまして、横浜の町の描写など見つけたわけです。

中村　貴重な体験談をありがとうございました。

出版にみる情報落差

中村　次に鈴木さんにお願いしたいのですが、鈴木さんは「横浜学を考える会」の推進者のお

一人で、ご経歴を伺うと、東京の方から横浜を見ていらっしゃる。ある刊行物で両地間のカルチャーギャップというか「落差」を論じていらしたのですが、その辺のところも含めて伺わせていただきたいと思います。

鈴木　「横浜学を考える会」になぜ取り組んだかのご質問ですが、私の場合は、はなはだ個人的な理由から出発しております。

私が横浜に引っ越してまいりましたのは昭和四十一年です。それまでは山形市におりました。四十五年に大学を卒業して、東京の出版社で十四年ほど働きました。出版社というのは、時間があってないような、しかも大変忙しいところですから、横浜に住んでいながらも、私の生活の場はすべて東京にあったのです。あらゆることが東京で完結しました。

このように十八年も横浜に住みながら、横浜と自分との接点が全くなかったのです。

「横浜」が私の問題になったのは、自分の出版社を横浜に起こした五十九年のことです。

出版社というのは東京にあると確かに大層便利なのですが、これからは、出版社が横浜にあっても、他社のまねの出来ない優れた出版物さえ刊行すれば、全国の読書人に支持していただけるはずだという信念を私はもっておりました。

横浜に出版社を設立する過程で、それまでお会いしたことのない地元の方々と接する機会が多々ございました。

ところが、多くの方々にお会いすればするほど、「あれ、東京と何かが違う、何かおかしいぞ」「横浜には何かが欠けている」「燃えるようなエネルギーがない」という気持ちになってしまったのです。ふるさと山形市に戻ったような錯覚というのか、そんな感じがしてしまいました。その「何か」というのは、結局、他人のもっている情報がかなり一元的で、しかも東京の情報の亜流でおもしろさに欠けているということです。おまけに東京と横浜の情報の落差ははなはだ大きすぎる。

長崎学との出会い

鈴木　ところで私は、東京の出版社時代の昭和五十五年頃に長崎とのかかわりがありました。日本で最初の英語辞書の影印版の企画立案のために、長崎にたびたび出かけることがありました。

その辞書は「諳厄利亜興学小筌」全十巻と「諳厄利亜語林大成」全十五巻で、出島のオランダ通詞（通訳者）たちの労作ですが、辞書が作られた背景には、こんなことがありました。一八〇八年、オランダ国旗を掲げたイギリス軍艦が長崎港に不法侵入してきた、例のフェートン号事件です。そのとき幕府の役人はオランダ語で交渉にのりだします。が、相手は英語でやってきますから、お互いに通じないです。幕府はカルチャー・ショックを受けて、急遽出島のオランダ通詞たちに英語の学習を命じたわけです。

この「英語辞書」の復元作業と研究書を出版するに当たって、もしこの辞書を日本文化史の流れの中だけでとらえても、辞書のもつ意義は何も見えてこないだろうと私は思いました。当時の世界の動き、フランス革命とか、オランダとイギリスの関係とかをしっかりおさえておかないと、この辞書のもつ本義は絶対見えない。そこで、英語学、国語学、歴史学、辞書学などの先生方に世界文化史の文脈で、この辞書がどんな意味を持つのかを解明していただきまし

た。

つまり、一つの事件を考えるとき、内なる視点と外なる視点ー日本文化史の視座と世界文化史の視座をもたねばなりません。

このことは、先ほど加藤先生もおっしゃったことと同じだろうと思います。

またこの辞書の企画編集中に、長崎在野の研究者の優れた論文に出会いました。この研究者たちには、まさに内なる眼と外なる眼が備わっており、常に中央の学問の世界に強烈なインパクトを与えていたのです。私は大変感動いたしました。

それ以来、私は中央と地方の情報の落差あるいはズレということを考えるには、「長崎学」から学んだ物の見方を大切にしようと思いました。こういう考えから、昭和五十九年の春、会社の設立と前後して「横浜学」を提唱してみたのです。

当初は「横浜学会」というのを提案したのですが、核となる方とお話ししているうち、「横浜学」という新しい言葉があまりにも生な言葉でなじみがなく、一般には定着しないのではないかと感じました。

それでは「横浜学」というのが、いったい成立するのかどうかということで、もう一つおまけの言葉をつけて『「横浜学」を考える会』とし、現在に至っております。

このように、個人的な理由ー東京と横浜の情報落差、長崎学との出会い、横浜に自分の出版社を設立するということが互いに結び付き、ある日突然「横浜学」に結び付いていきました。言い換えますと、「横浜学」は、私自身の横浜探しなのです。

中村　お話の中で、横浜にいながら、山形に戻ったというようなことがございましたが、それはどういうことでございますか。

鈴木　山形は城下町で、城を中心にして発達した都市、横浜は港を中心に形成された都市で、おのずから文化のつくられ方が違うはずですが、文化のありようが全く同じなのです。人と人との間の情報がはなはだ一元的で、なにか寂しさのようなものを感じました。

一つの街には、一つの都市には、そこに住む人たちだけのさまざまな独特の表情があるはずです。ところが、横浜で実際生活を始めてみると、ある種のエネルギーというか、生き生きとした表情が読めなかったという、非常に人間くさい言葉でしか申し上げられないのですが、その落差感なのです。

出版のテーマは横浜、視野は全国

中村　「落差」については、他にもいろいろ議論があろうかと思いますし、大変大事な発見ではないでしょうか。では、文化活動を通じて横浜を発展させようと日夜苦労されていらっしゃる平野さん、お願いします。

平野　私は昭和四十五年に出版をやらせて欲しいということで、有隣堂に入りました。以来十八年間、出版を担当してまいりました。有隣堂は、横浜を拠点として神奈川県を中心に店舗を展開しておりまして、販売業を営んでいるわけです。ですから、出版を事業として考える前に、販売活動を補助するという意味合いがありました。また、出版社として考えましても、どこに独自性を求めるかというと、やはり立地条件といいますか、神奈川にあるということに特色を求めますから、企画の内容は神奈川県に関するものになるわけです。

私が入社して五年目の昭和五十年に、専門のセクション、つまり出版課というのができまして、その翌年に「有隣新書」というシリーズを出したわけです。これは今でも続いておりまして、既に三十五点出しております。

どうしてこの新書を出したかといいますと、よくいわれることですが、文化が中央に集中していて、特色ある地方文化というものがだんだんと影が薄くなってきている。それを何とか維持発展させるといいますか、その一助になるよ

うな出版物をということで、このシリーズを企画したわけです。既刊分を見ますと、やはり半分は横浜に関するものです。

ですから、仕事絡みで自然に横浜と取り組み始めたということになろうかと思います。

先ほどの鈴木さんのお話に関連するかもしれませんが、この横浜の地域性というのは、いうまでもなく、一つの閉ざされた地域社会ではなくて、東京の方にパックリと口をあけているという特殊性がございます。ですから、金沢であるとか、岡山であるというふうな限定された地域社会の場合と異なり、横浜のような特殊事情を抱えている地域では、出版も、ちょっとやりにくい面があるわけです。そこで、テーマは横浜であっても、視野はあくまでも全国的な内容にしたいと考えています。ですから、出版物のタイトルも、横浜うんぬんというのは極力避けたいと考えてきているわけです。

それともう一つ、「有鄰」という月刊紙を出しております。これは、昭和四十二年に創刊しておりますから、もう二十一年続いておりますが、直接的な宣伝を避けて、読者の知的関心におこたえできるような内容にしようということでずっとやってきているわけです。これもそのときどきの話題とか、あるいは歴史的なこととか、いろいろ取り上げてきております。

中村　平野さんはずっと横浜にお住まいですか。

平野　私は生まれは新潟ですが、函館で育ちました。学生時代は東京で、横浜に来ましたのは鈴木さんと同じ、昭和四十一年です。同じ開港場で、港町ですから、気風というか、風土というか、そういうものが似通っていますし、なじめるような気がいたします。

中村　新潟、函館、横浜と並べるとご当地ソングのようですが、いずれも港町で、しかも、国際貿易港ですね。ところで、新潟というと、アメリカ的な横浜とは全く違ってソ連の方に目が向いている。町を歩くと、ロシア語講座とかソ連関連のものが、よく見られますね。

平野　函館もそうですね。ロシア正教の教会がございます。

中村　そういう意味では、横浜は外国といってもどこどこの国といわないで、外国と一般にいってしまって、あまり特定しないところがおもしろいと思います。

大学、職場、都市論を通して横浜に関心

中村　私自身は横浜に生まれまして、横浜に育って、また職場も横浜ということで、半ば義務的に横浜に興味を持つようになりました。

もう一つは、母校慶応義塾の創設者福沢諭吉

さんは、もともとは蘭学を学んでいたのですが、先ほどの鈴木さんのお話にも出ましたように、どうもオランダ語ではだめだ、これからはやっぱり英語だと目が開いたのは横浜へ来て感じたのだそうで、娘さんを横浜の女学校で勉強させた。

ところが、我が銀行の始祖である原三溪富太郎は東京で奥さん（横浜出身）とめぐり会っているのですね。これが私にはどうもよくわかりません（笑）。こんなところが、私の横浜に対する興味というか、横浜学みたいなものを考えなければという一つの取っかかりになっております。これが三つ目です。

第四番目。私自身は学生時代から「都市」という現象に非常に深い興味を持っておりまし

た。当時は大都市論が華やかなりしころでしたから、東京ばかり調べておりましたが、東京は私の手にはとても負えない。地方都市の方がおもしろいと思って地方都市をやろうとしましたが、卒業を控えて、これを勉強している暇がなくなりまして、自分のいる横浜を、まずじっくりと見なければいけないのではないかと思うようになりました。そんなことで横浜に対する興味は、自分の置かれた立場、慶応義塾とか、横浜銀行などを通して、深まっていった。皆様方のように「学」として、あるいは「論」としてという段階には至りませんが、多少関心が深いところでございます。

二――横浜学の基盤

中村　以上、皆様から横浜について取り組み始めた動機みたいなものを伺ったのですが、先ほど、加藤先生がおっしゃった「サル学の論法」を援用した恰好で、横浜に切り込むといったお話を、是非伺いたいのですが。

「横浜学事始」と学生の反応

加藤　大学の一般教育に総合科目なるものをつくろうというのが今はやりで、「それなら、おまえ、一科目をやれ」というので、「横浜学事始」を始めたのが昭和六十年です。ちょうど四年目に入りまして、その間、かなりいろいろ調べもしましたが、学生の反応からいいますと、大きくいって二つあります。

一つは、横浜市立大学の学生ですから、自分の今、学んでいるところが、どんな街なのか、その背景も知ってみたい。市内出身者が四分の一ぐらいで、あとは各地から来ていますので、その意味では「ちょっとおもしろいな」という反応です。

もう一つは、市内出身の学生の方ですが、彼らは意外と、横浜、横浜といわれるのが好きではない。つまり冷たい。そんなことしないで静かに放っておいてくれと。居住区ではなくて商業区あたりで何かやるのなら別だけれども、住んでいるところに看板が立ったとか何とかいうのは好ましくないという反応を、ちゃんとレポートに書く学生もいる。それもそうだろうという気もしています。

国家対国家から、都市の時代へ

加藤　それと居留地研究会というのを、横浜開港資料館で、やっています。そちらは割と学者的な人が多くて、報告や何かを聞いていると大変おもしろい。横浜開港から明治三十二年に撤廃されるまでの居留地の時期の外国人の中で、大体六割が中国人です。特に、条約を締結していない時期の問題から、条約を一応つくって日清戦争に入るまでの、居留地撤廃の直前に当たるわけですけれども、あのころの中国人の動きが大変大きな意味を持っているなということを改めて感じています。まだ現在の中華街のような飲食店が主流ではないけれども、一定の地域に集住して、仕事をしていた。中国劇場があって芝居をやり、日本人も欧米人も見物に来ていたらしい。歌舞伎と同列の意識で見ていたのでしょうか。こうした歴史的な背景があって、いま日本一の中華街がここ横浜にあり、都市の魅力を構成している。外国人というと、大体欧米人を思い浮かべる我々一般からいうと、どうも実態は違っていた。十九世紀末には、居留地に、日本の官憲の手が完全に入らないという状態があったから、逆に中国とか、ベトナムとか、いろいろな国からの一種の政治亡命者が入ってきた。それがカルチャーショックというのでしょうか、日本人は孫文をかくまうとか、結構一生懸命つき合っているわけです。おおらかで真剣だった。

そういう意味では、今の我々の持っている国の考え方と大分違う動きが、ほんのちょっと前まであったのです。むしろ現在の我々の方が、国単位という固い発想をし過ぎている。とくに

二十世紀になると、この傾向が顕著になってきて、戦争中がその頂点だった。戦後もかなり尾を引いていた。

それが最近になって急に、円高との関係で、日本から出ていく海外旅行者が大変増えてきていますね。そうすると、いわゆる国家間の関係として教科書で与えられたものと違う体験をする。例えば香港へ行く、インドへ行く、アメリカへ行く。僕らの学生時代には外国へ行くことなぞ、まず考えられなかった。最近の数年間の急速な変化で、たくさんの日本人たちが直接外国へポッと行って何かをつかもうとしているとき、どうも単位が国ではないのです。町とか都市とかいう単位の方がわかりやすい。アメリカといわずに、ロスへ行くとか、ニューヨークだとか、韓国というよりソウルになってきている。

そういう意味で、都市を通じて世界や、人間を考えるきっかけをつかむ時期に一挙に入ってきたわけです。

そうすると、その中間の約半世紀にわたる固い国家意識が一方で残っていると同時に、個人のレベルでは、いきなり外国ならその都市、そういうところへ結びついてしまう。つまり、次元が急速に変わってきているので、その意味での都市論みたいなものが、いわゆる学問的関心と並行して、大衆的基盤を持ってきたのではないかという気がします。

そこで、さっきのサル学ですが、つまり、自分は観察者で相手を見るだけというのではなくて、自分も一緒に、例えば香港なら香港、上海なら上海の街の中に入ってみると、こちらが動くことによって、相手の生きた反応が伝わってくる、それで初めて何か見えてくる。つまり、主と客がピッと分かれておらず、関係の中で、関心が広がっていく。

自分がいま旅をしている都市、滞在している都市を知ろうと努力する。努力すれば、知識は増える。しかし、そのうち、日本での自分の住んでいる都市、育った都市が何なのか、気になりはじめる。健全な反応です。外国に出ないでも、日本のある町から横浜に来て、その違いを感じる。だから「横浜学」なり「○○学」は、観察の対象であると同時に、また自分自身の住まう場所の確認でもある。

その一方で、日本に来ている外国人との付き合いも増えていく。過去においても在日朝鮮人や在日中国人がいたが、彼らとの付き合いは日本人は下手だった。差別意識がない人も敬遠していた。今後はもっと多くの国籍の人が日本に住む時代になる。彼らとどう一緒にやっていくかが試金石になる。アメリカのような移民国家の多民族社会ではなかった日本で、この多国籍化にどう対応し、どのようなことができるか、横浜はその点でも、いくらかは経験があるほうでしょう。

ただ、一方で大変困ることがあるわけです。学校で講義をすると、かなり体系的に教える方が学生にはわかりやすいわけです。受験疲れしている人間には、初めに定義をしてしまった方がパッと入るわけです。それを一度、壊そうとなりますと、こっちも壊さなければいけない。授業というのは残念ながら壊しっ放しでは困るわけで、後期の十一月ごろからは大変になるんです（笑）。壊したはいいけど、私なりに、これだけは何とかつくってみたんだけれどもどうか、というと、すごく不安な顔をするわけです。そんなことで格闘しておりまして、これはといった自信のある答えがあるわけではないのです。

国一般では語れない

中村　私、今夏、オーストラリアへ行ってまいりました。ブリスベーン、キャンベラ、シドニーという三つの都市を回ったのですが、今まさに加藤先生がご指摘になった、つまりオーストラリアというのはこういう国だとか、オーストラリア人はこうだということはいえないということをつくづく感じました。

と申しますのは、ブリスベーンの市役所へ行ってブリスベーンのネクタイを買い、これをしめて市内に出たら「おまえは、大変な親ブリスベーン派だ」といわれ得意になった。ところがです。キャンベラへ行ったらかなりのインテリに「おれはブリスベーンなんて大嫌いだ。おまえは、田舎者である」と言われてしまいました。私は「おまえはオーストラリアをよく理解してくれる」といわれると思いましたのに。さらにダメ押しは、ブリスベーンからシドニーに向けて汽車に乗りましてその中のバーで、「ビール」を注文した。「何の銘柄だ」と問い返されたので、私はブリスベーンで飲んでいたビールしか知りませんから、それをくれといったら、「冗談じゃない。この汽車はシドニーから来たんだから、そんな銘柄は積んでおらん」というのです。「ブリスベーンのビールなんか飲んでいるやつは田舎者だ」と、その汽車の中でもばかにされました。

私達はまさにオーストラリア一般とか、いや韓国がどうの、いやアメリカがどうのといってきめつけている。けれども、むしろ都市という水準で考えるべきではないか。そこで先ほどお話があった長崎学があり、東京学があり、横浜学といったものが生まれるのではないのかなと思います。今までの我々は何となく、東日本とか、関西とか、九州とか、そういうふうな大きな分け方で地域性とか特色を考えていて、都市というところまではおりていなかったのではないでしょうか。

佐藤先生、フランスをいろいろ勉強していらして、フランスの都市同士では、今いったようなオーストラリア的なところがあるのでしょうか。

佐藤　ありますね。私は、もう二十年も前のことですが、フランス政府から奨学金をもらいまして留学した先がニース大学です。ニースというのは、ほとんどイタリアというか、外れです。ですから、ニースの人がパリのこととか、フランス全体のことにどれぐらい関心があるかというのは大変疑問でした。

横浜学は地域に根差した努力と普遍性を

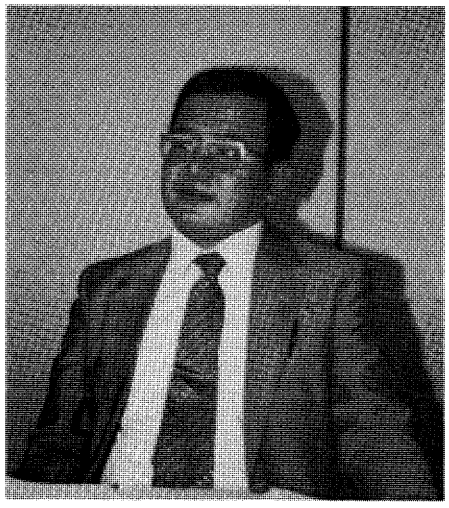
佐藤　今日の座談会で横浜学ということからイメージすることと、現在、私がしていることをあわせてお話しますと、私が横浜学という言葉からイメージするのは、ある郷土史の研究に偏るということではないんです。例えば先ほど中村さんから福沢諭吉の話が出ましたが、福沢諭吉というのは「適塾」ですね。緒方洪庵が大坂に開いた蘭学塾です。大坂塾ではないけれども、つまり大坂という地域そのものが大事だったのではない。あるいは「水戸学」という言い方があります。水戸学は確かに、水戸の徳川家が勧めて「大日本史」という膨大なものを二百五十年くらいかけてつくったわけですが、それも、水戸というところが大事だったのではない。ただ、水戸学派の人が、例えば天皇家の歴史に関して南朝の正統論を述べ、新しい独自の解釈があって世に残っているわけですね。あるいは緒方洪庵の場合には、適塾の蘭学、洋学の優先ということが明治以降も影響を与えている。

ですから、そういうことを考えますと、ある地域に根差した努力と、それから国際性を持つといいますか、普遍性を持つということの両面が、何々学という地名のついた学にはあるように思うのです。

だから、我々が、例えば中村さんを中心に中村塾みたいなものをつくりまして、そこで、ある種の有志が集まってやっているうちに、ほかの人たちが、あれは横浜学派だといってくれるというのが私のイメージです。

横浜学は新しいコミュニティ形成が基盤

佐藤　もう一つ、私共横浜国大では、昭和四十八年から総合科目を置きまして、その中で横浜というテーマを常時やっておりますが、私の感じでは、学生に横浜についていろいろな面から



教えるとか、あるいはそれを一冊にまとめたとしても、それが即ち横浜学というふうにはならないだろうと感じます。

それで、横浜学というのが、もしあり得るとすれば、その基盤は新しい意味でのコミュニティーの形成が基盤になると思うのです。その新しい意味といっているのは、閉ざされた地域共同体ではないということですね。古い地域共同体では個人の創造性とか自主性というものが、しばしば抑圧もしくは埋没されますので、そこからは学と名のつくような創造的なものが出にくいだろうと思います。ですから、仮に金沢学とか、あまり自分のところの歴史とか伝統だけをプライドにしているとすれば、国際性はおろか、ある種の普遍性が出てこないのではないかと思います。まさに先ほど平野さんがおっしゃった、「横浜を扱うけれども……」といっているのと同じことだと思います。

そういうことで、少なくとも、これからは国際性の時代であって、かつ地域の伝統と文化がないところでは、外国からだって興味を持たれないということを念頭に置いた国際性でなければいけない。したがって、私、一般教育でフランス語を随分教えていますが、例えば外国語教育などでも、今までのような、〝ニコニコ英語〟といいますか、つまり外国人が道に迷って困っているときに助けてあげるということが国際性ではないのだ、けんかするときには、きちんとけんかができる外国語こそが国際性に役立つという方向にいくべきだと思っているわけです。今までのは、どうもニコニコしていて、その上欧米人というのは白人だけだという感覚が英語の教科書づくりにも、それから外国語の教師にもあったのではないかと思います。

それはほんの具体的な例ですけれども、本当の国際性とは何か、その地域の文化とか伝統というのを、どういうふうにミックスさせるかというのを考えるコミュニティーの場が横浜学の基盤になるというふうに感じています。

中村　大変いいご指摘でしたね。横浜国大ではその辺にかなり早く着目されて、いわゆる「地域学」をお始めになっていらっしゃるわけですけれども、鈴木さんのようなグループというか、お立場の方々はお仕事を通して、そういうことを実際に感じられたはずです。そこで、今の佐藤先生のお話をお聞きになって、大学での研究と実社会でのそれについていかがですか。

横浜学は発見の場

鈴木　私の場合は、前にも申しましたように、仕事を通して横浜という都市を再発見する機会にめぐまれたわけです。つまり、それは都市の中で生きていて、結局、それは私自身の都市の楽しみ方の再発見なのです。

ただし先ほども申し上げたように、『「横浜学」を考える会』には七十人ぐらいの方が集まっていますが、七十人集まれば七十の「横浜学」があってほしいし、七十人の研究方法があってほしいと常に考えています。一方的に知識を上から下へ流されるような組織運営による会の楽しみ方はまずいと思います。

つまり従来の市民大学講座とかカルチャー・センターのようなやり方、一方に情報をたくさん持っている人がいて、かたや生涯、生まれてから亡くなるまで、幼稚園からお年寄りになるまで聞き役で終始してしまうというやり形はやめてほしい。そうではなくて、今日は生徒だけ

れども、明日は先生という関係になりたいのです。

だから、横浜だったら横浜で、どんな小さなことでも、自分の問題として考え、何とか発見する喜びがあってほしい。その発見を大事に分かち合ってほしいというのが私の考えの基本にあります。生徒が先生になる、先生が生徒になっていく。それで、プロはプロなりの手法で、アマチュアはアマチュアで、発見したものをお互いに発表し、お互いに還元しあっていこうではないかという、「発見の場」としての「横浜学」をすすめていきたいのです。

先ほど世界の都市のお話が出ましたが、魅力ある都市というのは、よく考えてみますと、貿易量が多いとかいうのとは違いまして、集まっている人間一人一人がどれだけ発信するための優れた情報を持っているかどうかによります。

だから、私としては、個々人が発信するメッセージが豊かで多ければ、その都市は大小にかかわらず、都市の魅力を持続していけるだろうと思います。多様にして多彩な個人のメッセージや卓越したメディアをもつ都市であれば、人はどこからでもお金を払ってでも訪ねてきます。

ニューヨーク、ロンドン、パリの魅力も、先ほどの長崎の魅力も、そこに住む人達の魅力の集積にほかなりません。

長崎在野の研究者、古賀十二郎や渡辺庫輔たちは、昭和初期に長崎という都市を、日本文化史のみならず、世界文化史の流れの中でとらえるという方法論を既に確立し実行していました。現在は、第二次の長崎学会が越中哲也先生らによって進められています。

ニュー都市学とも呼べる「横浜学」を考えるにあたっては、長崎学のことも学ぶべきだと私は思っています。

ところで『「横浜学」を考える会』で、私の場合は、夏目漱石と横浜豪商の子息たちとのかかわりのなかで横浜人というものを考えてみました。私のようなアマチュアにやれることは限られているけれども、どんな小さなことでも調べていけば、これまで誰も発見したことのないものに出会います。従来の国文学の系列とか、英文学の系列、歴史学の系列などだけではとてもとらえられないおもしろいことがみえてくるものです。

楽しみながら発見する、これが「横浜学」の醍醐味です。どんな小さなことでも何か他者にインパクトが与えられればいいと思っています。

会に参加している七十人には七十人の考えがあるわけですから、これは会を代表して申し上げているというわけではなくて、いずれ学問としての横浜学にするか、あるいはもっと枠を広げた形の横浜学（楽）にするのかというレベルでいくと、参加者の間で討論を積み重ねなくてはならないでしょう。

中村　なかなかおもしろい展開で、さらに伺いたいところがありますが、平野さんのご発言を、もう一度お聞かせ願いたいと思います。

横浜学にデータの提供

平野　横浜学というのは発見の場であるというようなことで、個人個人が何かを発信するということなのですが、私はささやかな出版元の立場として、それのヒントといいますか、あるいはデータといいますか、そういうものを提供するのが私共の仕事だろうと思うわけです。そこで、出版物と「有鄰」によって、いろいろな歴史的な事柄とか、あるいは現在直面している問題を掘り下げて提供したいという立場で取り組んできているわけです。

例えば、先ほど中村さんからお話のあった横浜銀行さんの始祖ともいうべき原三溪につきましては、有隣新書の一冊に伝記がありますし、また「有鄰」では数年前ですが、二回続けて座談会をやっております。つまり横浜にとって歴史上重要な人物を取り上げているわけです。

現代的な問題ということになりますと、上行寺遺跡の保存問題があります。金沢八景の宅造地に上行寺遺跡が発見されまして、そこにマンションを建設するか、遺跡を保存するかで大変な論議になりました。それは当然新聞記事になりました。

けれども、その遺跡がどれほど重要性があるのかについては詳しい報道はされなかったのです。地元紙は、そういう情報をこそ提供すべきではないかと思っていたのですが、そういう気配がないので、それを座談会に取り上げました。そんなようなことを、横浜についてはやっているつもりです。

もう一つ、今、たまたま横浜市の技能文化会館で「横浜洋家具の歩み」という展覧会をやっておりますね。これは「横浜家具を通して文化を考える会」という、「横浜学を考える会」より長い名前の会がありまして……。

中村　加藤先生も発起人のお一人で……。

平野　それはどうも、知りませんでした。けなそうというのではないのです（笑）。私は非常におもしろいと思いました。これは、いってみれば横浜学の一分野をテーマで切ったわけですね。ですから、こういう行き方、テーマ別で考える会というのがいろいろあってもおもしろいのではないかなという感じがいたしました。

中村　確かに、おっしゃるように、地域文化の切り口はいろいろありますね。どうも「学」というと、こちら側のお二人の先生方が研究室の中などで静かに何かを研究されているというイメージを与えがちです。ですからこそ、鈴木さんがさっきおっしゃったように「……を考える会」という存在が前者と違う面を出せると思います。どうも今のところ、考える会ばやりですけれども、確かに横浜学の切り口として、「横浜家具を通して…」はおもしろいですし、その他にも多分いろいろなアプローチがあろうかと思います。

こういうさまざまな人たちの動きがあり、また大学の中でも総合科目などがいくつか展開されていて、今までの都市論とはちょっと違った意味の都市論、ある意味では新しい総合地域論が進められている。我々がこういうことに目覚めなければならないような背景というものについて、整理していただくと、今後のお話がまた一段と進むのではないかという気がしますが、加藤先生いかがでしょうか。

都市の魅力が「横浜学派」を生み出す

加藤　先ほど申しましたように、人間の移動が大変大きくなってきて、とにかく別のものに触れる。その対象が都市か町か、その辺の単位になってきて、一過性の体験であっても、時間がたつにつれて、何か自分の中に沈澱してくる。それでは自分の住んでいるところはどうかなと関心が向く傾向は、どんどん増えていくと思います。

その「かぎ」が何なのかという問題が多分にあって、随分いろいろなことが考えられます。私自身は、期待としては、佐藤さんがさきほどおっしゃいましたが、横浜学はある意味ではどうでもいいので、横浜学派――学派というのは学者ばかりの集まりでなくて、画家や大道芸人、それに物理だ、経済だ、もちろん歴史だ、文学だというようにさまざまな得意分野や関心をもった人々の集まりであって、横浜に何かすごいのがいそうだぞということが大切なのです

ね。昔、シカゴ学派とか、フランクフルト学派とかいうのがありましたね。人々がそれぞれ独自の発想力、情報力みたいなものを発揮できる場。市域に住んでいる人も勤めている人も、たまたま住んでいなくても遠くから、あそこに月に一遍行ってみようということで集まってくる人間が多くなる。特定の都市に魅力があるがゆえにやってくる。喫茶店だろうが酒場だろうが、そこでの談笑の中から生まれてくる、そういう横浜学派を期待したいですね。

ところで、その誘引力というのは一体何だろうかということになるのですが、これが大変難しい。

都市の文明的蓄積が個性的文化を生み出す

加藤　議論の上でちょっと遠回りになりますが、別の問題から考えてみようと思います。私達は「文化」という問題と、「文明」という問題をかなり混同して使っているところがあります。かなり強引な分け方をしますと、文化というのは個性化なのです。個性というのは、ほかと違うという目立ちたがり屋ではなくて、こういうことをしたいという燃えている集団がいること、それが文化の個性をつくるわけですね。

それに対して、文明というのは、街のハード面だとか、あるいは建物の高層化というような様式だとか、電算機とか、交通・通信の手段とかいったもので、これはある意味では世界中にパーッと伝播していくもので、便利で大いに結構なものということになるわけです。そういうふうに思い切って分けてみると、やはり、文明的な蓄積が都市には必要ですし、横浜市もそれはどんどん進めていくべきだと思います。それは金であり、例えば行政の投資であり企業の進出であると思いますが、都市の一種の基盤整備みたいなものが、進んで行くことが、逆に個性としての文化を画一化し、破壊しかねない。過去においては、その例のほうが多かったかもしれない。どの町も駅前は同じ構造と建物であるというように。こんなに車ばかりの道にしていいのかとか、いや横浜の道路事情は良くないから、道路をまず拡張せよとか、公園が少なすぎるとか、ぎくしゃくした矛盾を生みつつ、やはり、背後にある基盤整備が前提になってこそ、個性的な文化というのがあると考えないと、どうもまずいような気がします。

というのは、私の住まいの一つは、ほんとに山の中です。そういう場所から見ると、文明的な基盤整備がないことが、逆に文化の個性を育てられない一種の屈折した状況に変わっていくことを身をもって知らされます。過剰に基盤があるところでは、もう要らない、もっと緑だとか、茅葺き屋根が欲しいのだということになっていくわけですが、そういうものがたくさんあっても、都市基盤を軽視したら、絶対その都市の個性というのは出てこないと思う。

話の筋を少し複雑にしてしまいましたが、都市という「かぎ」で識別するようになっている。その都市の魅力が、人を呼んで、横浜学よりも、横浜学派みたいなものが、自然に生まれてくる。その中には洋家具についてのプロがいるとか、いろいろな格好で、ふくらみがあった方が当然いいわけですが、そのように人が集まってくるという、その誘引を考えるときに、過剰な人工物がふえることがマイナスになるのか、プラスになるのか選択を横浜は迫られる時期にきていると思います。

私は、そこは先ほどいったように基盤整備は先に進んでいた方がいいと思います。それによって文化の個性というのは逆に出てくるだろう。しかし、放っておくと、基盤ばかりが一人歩きするわけです。何が必要で、どの面に注意しなければいけないのか、そこのところが一番難しいという気がします。

もう少し具体的な話になると、一過性の祭りをボーンとやって、それでおしまいの方がいいのか、それとも、あれだけの金をかけるのだったら、もう少し方法があるのではないかという

ことも考えております。それは行政の投資をするときの基本的な、まだフィロソフィーがふらふらしているということに多分起因しているのだと思います。祭りのようなイベントにかける投資が、本当に、ある意味では考え抜いた文化政策を持った上であったのかという点に疑問が残るのです。

「ヨコハマ」から「横浜」へ

中村　数とか大きさなどは非常に難しいとは思いますが、しかし、考えなければいけない問題です。世界中には三百万人で国家になっている国も幾つかあるのではないか。正確に調べたわけではありませんが。そうなると横浜市の三百万人というのは一つの国の単位ですね。そこで横浜学一つで横浜をくくってしまうということは、問題になるのだと思います。ですから、近年、横浜の各区が区史をつくっているようですが、そういう意味では視点や対象を狭い地域におろして、中区、緑区といった規模で地域のことを考えるという時代に入ってきているような気もします。

ときどき私は申し上げるのですけれども、横浜を考える場合、これは鈴木さんの論文にも出ていましたが、「ヨコハマ」と「横浜」をごっちゃにしていると思う。多くの場合「ヨコハマ」つまり中区の方ばかりを見ている。そうではなくて、鈴木さんのお立場は、かなり広い範囲の「横浜」という地域を重視しておられる。

どうも、今までの横浜学というのは、どちらかというと、「ヨコハマ」に目が向いているというか、中心に据えているという感じがします。これからは、その辺を反省する時期でもあって、各区がそれぞれに、本の大きさもばらばらで、厚みも違うようですが、区史あるいは区誌というものをつくるということは、ある意味では横浜学を支える「部分」かなと考えています。

出版物も「ヨコハマ」が中心

中村　平野さんから、先ほど上行寺のお話が出ましたが、恐らく、港北区や緑区の人にとっては、あそこで何を騒いでいるのだろう、どっちがいいのか悪いのか、よくわからないというのが実情だと思います。それだけ横浜は広くなってしまったのではないでしょうか。この辺で、いつもいろいろ題材を探していらっしゃると思いますが、ご苦労みたいなお話をいかがですか。

平野　どうしても題材は歴史の方に偏ってしまいますが、横浜自体の歴史が百三十年しかないわけですから、まして新しい区といいますか、周辺区に題材を求めるというのは非常に難しい。今、お話のように、いろいろな区でいろいろなものを出していますが、実は、もう十年近く前のことですが、各区の歴史を一般向けの本にして、それをセットにして販売したらロングセラーになるのではないかという案を私が考えました。それがぼやぼやしているうちに各区が出してしまった（笑）。ひところは専門書スタイルの区史がつぎつぎに出まして、それはそれなりに大きな役割を果たしたのですが、今は大変柔らかいのが多い。例えば私がたまたま、きのう手にした「フォトアルバム想い出の保土ケ谷」は区が中心になってお作りになったものですが、内容はまさに大変柔らかい、親しみの持てるものでした。

こういうものが、どんどん出始めた原因というのは、一つには大手の印刷会社が横浜に出先を設けまして、デザインからレイアウトから何でも引き受けるようになったことにもよります。さらに編集プロダクションも今や花盛りです。ですから、編集制作面のノウハウがなくても、案を出して材料さえ提供すれば、ハイレベルの出版物ができるようになったという状況がありますね。

以前は、例えば、私が有隣堂に入りましたころに、「神奈川の歴史」という全三巻の本が大変売れていました。読売新聞横浜版の連載記事をまとめたもので、内容的には今見ると物足り

ないものですが、当時、類書というものが全くありませんでした。ですから、増刷を重ねて全部で三万六千部ほど売れました。今は絶版になっております。その後類書がどんどん出るようになりましたので。

ですから、横浜に関する出版物は、ここ十五年ぐらいの間に随分変わってきていると感じますね。ただそれも、今、お話のように、どうしても旧市内の方に偏って、周辺区に関するものは少ないですね。

中村　本来、歴史は港北区や緑区の方が古くて、人も住んでいたのでしょうけれども、やはり横浜というと地域的には偏りがちになってしまいますね。

ところで数ある横浜研究の文献の中で、横浜市立大学の経済研究所が出された「横浜経済・文化事典」というのは、私がまだ在学中でしたけれども、初めて拝見したとき、内容豊富で新鮮でした。もう用紙が真茶色になっていますけれども、よく書棚から出しては見ています。内容も編集も非常にいいと思いますね。

鈴木　あれはいい事典ですね。

中村　先年、「神奈川県百科事典」というのが出ましたが、ちょっと厚過ぎて、座右に置くというわけにいかない難があります。

いずれにしても、限られた地域で内容を考えていく方法は、平野さんのお話では、出版技術とか印刷技術とかにも根差しているということで、これにはつい気がつきませんでした。それはそれとして、なかなかおもしろい取り組み方というか、成り立ちですね。

講座では動いている課題を

中村　佐藤先生は横浜学を横浜国立大学でいろいろお教えになったり、またマネージしていらっしゃいましたが、そこでのご苦労なり、企業秘密でしょうけれども、これから、こういうことをやってみたいというお考えがございましたら……。

佐藤　大学で総合科目の横浜の世話人をやりましたときに、一番気をつけたのは、既に決まってしまった過去のことを体系的に教えるということは少なくして、現に動いていることに力を入れました。例えば遺跡の問題もそうですけれども、文化財の保護と宅地開発の問題にじかにかかわっておられる歴史の教授をお願いするとか、現実に横浜と軍事基地の問題を調べている法律家をお招きするとか、現在動いていること、あるいは未来の展望という面を少し入れたわけです。

つまり、過去の入門的な知識は教えやすいのですけれども、私はそれだけではあまりおもしろくないと思ったわけです。

文化は平等感覚の中から生まれる

佐藤　ただ一つ申し上げたいのは、私自身は大学の中とか研究室の中よりも、住んでいる団地から学ぶことが多かったわけで、先ほど、鈴木さんのおっしゃった教える者と学ぶ者との随時交代制という実験を、十年ほど前と、現在と、二回やっております。

十年ほど前は、自由塾というのを仲間とつくりまして、その塾長に形だけ私がなりました。それについて具体的にいいますと、例えば多少かかるお金を誰が出すか、という問題がありました。それはそのときの講師が、ビラの五百枚を印刷する代金を出す。一人四千円ぐらいずつ、四人の人に自発的に頼む。そうすると一万六千円集まるから、それで会場費と何かを賄う。そうしたらみんな、何かの講師をしてお金を出すのは初めてだと快く応じてくださったわけです（笑）。ただし、一時間はその人の問題提起で、あとの一時間は自由討論。そこでは酒でも何でも楽しみながらやるというスタイルをつくったわけです。

現在は、磯子区の団地の一画にコミュニティー・サロンを仲間と運営しておりまして、そのコミュニティー・サロンの一環としてスタ

ディー・サロンと称するものもあるんです。ところで、教える者と学ぶ者との交代制という、私たちが実験したことの一番大きな問題は、肩書なしの市民としての付き合い方です。平野さんの名刺を見ると「課長」です。鈴木さんも「代表取締役」ですね。しかし地域でやるときには、それは関係がない。広くいうと、市民としての平等感覚というのをどうやってつくりだすか、そこが大事な点なのです。それはかなり時間がかかる。肩書の感覚がある限り、私は横浜学派というのはできないのではないかと思うわけです。そういうことでも少し関連しますが、今、週末に談笑するために、ある場所を確保している。そこで生涯学習をしたい人はするということをやって、今、そのサロンは三年目になります。ご承知のとおりフランスではサロンの影響というのが、あらゆる分野で相当大きかったわけです。

市民の平等感覚を阻害しているものは、いったい何なのでしょうかね。日本の縦社会と同時に、学校教育の問題、いろいろなものが含まれているようです。つまり、日本の場合には、ある均質なものが秩序立って団結をつくるとやりやすい。企業のように、それが成功している部分もあるわけです。

ところが、本当の文化――文化、カルチャーというのは、実は畑を耕すことだと思いますが――はそうではなくて、多様性のあるものがどう調和するのか、調和した中で個性がどう出てくるのかということだと思っているわけです。

ですから、私の場合はまだ実験中でして、何の業績も、地域に関してないのですけれども、一応、その実験だけは十年ぐらい前から続けております。いつか資料にはまとめたいという気はあるのですが。

要するに鈴木さんのおっしゃったこと、市民の平等感覚が一番もとになるのではないかと思っております。

中村　スタディー・サロンでのお話の題材といいますか、テーマはどのようものですか。

佐藤　今、二つ柱を立てております。一つは外国文化を知るというテーマで、主にアジアを取り扱おうと決めまして、毎回一人、横浜に在住している韓国、中国、フィリピンなどの方を呼んで座談会をして、そしてその後自由討議をするということがあります。

もう一つは、消費者から見た経済を考えるというもので、例えば税金を取り上げています。団地の場合、自分の住んでいるところの固定資産税というのは、団地ですから土地が共同になっているけれど、どうなっているのか。斜面になっているところは、どうなっているのかということを、実際に台帳を取り寄せて調べてみる。これは昼間、時間が空いている方が、区役所へ行って資料を取ってくるなど、足もとのことをやっているのです。

あるいは銀行とか、株とか、各回によってテーマが違いますが、今の証券問題でも、問題はどこにあるのかということを、実際に東京証券取引所に見学に行ったり、パンフレットをもらったりして、それを地道に自分たちで考えるというグループもあります。今、その二本立てで、スタディー・サロンの方は、二年目に入っています。

それが、そのときだけの集まりではないということが大事なのです。そのときだけの集まりからは、どうしても親しみの感覚が生まれにくいわけですから、いってみればインフォーマルな場面というのを、なるべくつくるということでやっております。

横浜学は、横浜のことを研究する。横浜の人が何かを考える。――二通りある

中村　今、佐藤先生から大変貴重なご意見というか、ご提言が出されました。つまり横浜のことを研究する横浜学と、平野さんが最初におっしゃったように、基盤というか視点は横浜だが、横浜だけのことを考えるのではなくて、横浜の

人が何かを考えたり、研究する。それが横浜学なり、あるいは加藤先生が何度もおっしゃった横浜学派。つまり横浜学派というのは、何も横浜開港の歴史とか、居留地のこととか、歴史ばかりではなくて、いろいろなことを考えている人の集まりということなのですね。

ですから、多分、横浜論とか、横浜学派という言葉を聞けば、誰でもが、これは横浜の過去のことを研究している、あるいは横浜の現状や将来のことを研究する学問であり、あるいはグループだと考えるのです。しかし、そのテーマはたまたま横浜であってもいいし、何も横浜でなくてもいいのだという意味では、横浜学派といっても内容的には、二つに大別されるわけです。

佐藤先生の方では自由塾を通じて、横浜学派が少しずつ形成されていくようですし、鈴木さんの方のお立場は、とにかく横浜にこだわっていくということですね。

鈴木　ええ、一応会則がございまして、会則の第一番目が「横浜に関することを研究する」というのです。ただ、横浜市民だけが研究するのではないということは、はっきりしています。横浜に関心のある人なら、誰でもかまいません。外国の方でも問題がありません。いろいろな人がいろいろな立場から、横浜や横浜人を研究してほしい。それで、なおかつ、会に何か新しいことを付け加えてほしい、ということです。

横浜学は総合的な力量アップから

鈴木　そんな意味で五十九年十月から毎月一回、会員の研究発表を公開講座というかたちで、やってきました。

たまたま京都の人に、「僕らはこんなことをやっています」というと、「いいですね。横浜は、そういうことがやれるから」。「じゃあ、京都はどうしてできないんですか」。「あまりにも歴史が長過ぎる」と言うのですね。京都は歴史というのではなくて、そのものです。神戸の方に聞くと、「神戸は商売がうま過ぎて……。横浜みたいにしっとりやっているのがよろしい」と。東京の編集者とかマスコミ関係の人に言うと、「横浜はいい。名前がいい」と言う。埼玉学派ではなくて、千葉学派ではなくて、名前がいいからということで、そういう羨望のまなざしというのがあるわけです(笑)。でも実際、毎月やっている側とすれば、暗中模索もいいところで、手探りで回を重ねることによってしか、新しい局面は切り開かれないと思っています。「横浜」をテーマに掲げて大学で研究する場合と、私達の「会」はおのずから意義を異にするでしょう。

今日も、こちらに参りますときに、横浜学というときの「横浜」とは何だろうと考えておりました。それから「学」という言葉も曖昧で、定義も難しいにちがいないと思っておりました。

しかし、さまざまな個性をもった人達が、横浜という都市を時間と空間からもう一度検証することによって、とにかく、今まで知らなかったもう一つの「横浜」が見えてくることだけは確かなことです。時間というのは、歴史的なものの見方です。空間というのは、実は海から横浜を見る眼、あるいは運河から横浜を見る眼、さらには世界各地から横浜を見る眼でもあるでしょう。

横浜の人口は三百万人を超えています。私は横浜を辺境（フロンティア）の地と位置付けています。すなわち、横浜は固定したイメージをもつものではなく、たえず新参者によって打ち砕かれ、さらに新しいものが付け加えられていく余地のある都市と考えたいのです。

しかし残念ながら、十代半ばから五十代の学生やビジネスマンら百七十五万人のうち、なんと六十二万人が昼間東京や川崎に出ていってしまっています。昼の横浜は、女性の方と専門職の人だけという気がします。その寂しさは、いかんともしがたいのです。

ですから、「会」にお電話をいただく大半は「来年、定年になります」「あと向こう三年で定年になります」「定年になりました」という男の方が四五％。それから、三十代、四十代で「カルチャー・センターや市民大学講座には飽きました」と、何か探しているパワーにあふれる女性が四五％。残りの一〇％がテーマによって「懐かしくて」という層です。

私が期待している二十代後半から五十代までの、いわゆる現実を生きぬいている人たちが、横浜に対して何を思っているかというところが探れない。そうすると、会もレトロとしての横浜研究に終始してしまいがちです。つまり、当初私が求めたものと、いささか違っています。

しかし、だんだん横浜の現在と未来を包括した問題をも取り上げていこうと思っています。横浜学を考えるには、結局人づくりが何よりも肝心です。プロの大学人や研究者だけでなく、広く横浜を研究する人々の層が厚くなればなるほど、横浜は魅力ある都市になるからです。時間はかかるかもしれません。また、そこは華やかさや派手さはないかもしれませんが、これから地域とか、コミュニティーを考えていく場合、どうしても、そういう積み重ねが必要だと思います。

私の「横浜学」は広い意味での横浜人のライフ・ワークの構築の場です。

これから横浜学を広く、深く育てていくには、小さなコミュニティーといえども、一つの大きな体系や組織に組み込まれることなく、あの会もこの会も総合的、かつ自在に伸びていくという組織づくりの理念にたった方がよいと思っています。

三――横浜学と行政

横浜の行政力

中村　今朝の新聞が横浜市から地域研究に対する補助金が出たということを報じておりました。あれを拝見すると、全部大学の先生のグループですね。

佐藤　私もその補助金をいただいています。私の場合は、フランス文学かフランス語の研究でないと、大学の中では研究費が出にくいわけです。そこで、行政にお願いして、研究仲間と一緒に補助金の申請をした次第です。

私はここで行政と横浜学のかかわりみたいなものを、最後に考えたいのですけれども、横浜というところは、一九六三年から飛鳥田市政が始まって「住民参加」だとか「市民のための行政」ということを旗印にしましたね。

そこでの一つの落とし穴は、「市民のための行政」といったときに、行政というのは市民と別のものであるという前提があるかどうか。具体的にいいますと、市長なり市の職員の方は、家に帰ったときは市民であるのかないのか、ということがあると思います。私どもが考えているサロンというのは、市長はお忙しいだろうけれども、実は会社にお勤めの方も忙しいわけです。ですから、サロンを愛好する者というのは、そういう職場の中の感覚を転換できる人です。ですから、草分け的というとおかしいですけれども、最初にやり出そうとするメンバーというのは、忙しいか忙しくないかを基準とする発想をまず変えること。自分が一カ月なら一カ月のうちに何％の時間を地域で楽しめるかどうかという、その発想でないとだめだと思うので、行政としては、それを手助けをしていただきたい。確かに手助けをしていただいているところもあるのですけれども、なおかつ、行政の方自身にも、一人の市民として出ていただければ、これがベストです。昼間はお役所の窓口におられるけれども、週末のサロンでは一緒になって酒を飲めるというふうになるのが、行政と市民のあり方としては理想ではないかなと思うわけです。

ただ、横浜というのは十分にその可能性があると思っています。例えば、「調査季報」にし

ても、昭和三十八年に出たときには、全国で例がなかったのではないですか。そして、前からもときどき拝見していますけれども、学際的な、専門性にこだわらない記事をお入れになっているし、そういう面では行政との協調関係、あるいは行政の方自身の発想の転換というのが可能な土地ではないかなと、個人的には思っております。

中村　それは要するに、横浜の行政が持つ力ですか。

佐藤　そうですね。しかも、そういうことを指向しているのではないかと感じますね。例えば地域研究の助成金というのも、ほかではあるのですか。あまり例がないのではないですか。しかも、その助成金のあり方も、私がいただいている実感では、官庁にありがちなうるさいことを、いわないです。

中村　「調査季報」のテーマを拝見すると非常に幅が広いですね。自然科学から、社会科学的な問題まで、すばらしいことだと思いますね。「調査季報」がこの座談会を開くということは、行政としても、こういうものにかなり関心を持ち、また実践していきたいという意志のあらわれとみていいですね。けれども、一体、これからどのようなことを旗印にして地域研究というものを進めればいいのでしょうか。

それは行政に対する要望でもあり、また横浜の市民として、こういうふうなあり方を望むというようなことで、それぞれのご提言、ご意見の開陳をいただきたいと思います。

平野さんからは、先ほど来、大変実務に根差したお話を伺っていますが、お立場をお離れいただいても、いただかなくてもよろしいですが、役所が、横浜学を何とか振興したいというのであれば、どういう形で進めればよいか、この辺についてお考えを伺わせていただけたらと思います。

意見発表の場を

平野　結局、横浜学が市民レベルでいろいろな研究がなされ、また発表したいという人もあらわれ、実際、発表もした場合に、これを一般の人に知ってもらうということがなければ意味がないと思います。あるいはまた、こういうことをやっていますというPRとか、そういうことも必要だろうと思います。

特に、研究の、あるいは意見の発表の場を考える必要があると思うわけです。ですから、「横浜学を考える会」で会報をお出しになったのは、大変意義があると思います。しかし、広く普及させるという点では、何か印刷物なら印刷物、あるいはそういう発表の会なら発表の会というものを推進するために、横浜市の方で何かきっかけなり、あるいは費用なりを負担していただくとかいうことが望まれるのではないかと思うわけです。一私企業が、例えば有隣堂がそういうことをお引き受けして全部やる力はもちろんありませんし、当然、そこには採算性ということも考えなければいけないわけですから、やはり、特に費用の面で、面倒を見るといいますか、そういう形になればと思います。

中村　こういう事業をするときに、かなり経費というものが大事なわけですね。

平野　そうです。

主体は市民――行政が支える

中村　そこでもう一度伺いたいのは、何かを実践する主体は一体どこにあるのでしょうか。誰かが勝手にやればいいのかもしれない。そうはいっても、例えばこういう座談会を行うに当たって、どういう方をお招きするかということで、恐らく当局者はいろいろ考えたと思います。まだまだ横浜を考えるグループや会合は、名称はともかくたくさんあろうかと思いますが、そういう主体というものを、どのようにして見つけるのか。見つけたものをどのように育成・発展させるのか。この辺については、今まで本づくり、「有鄰」づくりでご苦労なさってきたと

思いますが、どうお考えですか。

平野　それは、あくまでも市民の方から名乗り出るという形がいいと思いますね。最近知ったのですが、横浜の名産といいますか、横浜独自のものを提案すると、市が助成するというような制度を、市の方で取り入れつつあると伺っていますが、そういう方法を横浜学というものにも適用できないかなという気もするのです。よくいいますが「金は出すけど口は出さない」。これは虫がいい話ですけれども、そういう立場で側面から市の方で援助してもらえればと思います。主体はあくまでも市民の側で。しかし、それを具体的にどうするかというと、なかなか難しい。

ですから、「横浜家具を通して文化を考える会」というのが、一つのちゃんとしたシステムがあって、市の方へ申請すれば援助するとか、そういうふうな方法かなと思いますけれども。

中村　今のところはあまりそういう道は開けていないようですね。閉ざされているということはないと思いますが、それほど間口が広くはないのではないか。文化団体も幾つかあって、いろいろご援助をいただいているようですが、より一層パイプを太くするというか、間口を広げてくださるといいと思いますね。

実際にそういう「会」を運営されている鈴木さんのようなお立場からは、これから横浜学という活動を進めるに当たって、必要なものはどのようなことでしょうか。

いつでも誰でも集まれる場が必要

鈴木　先生方や平野さんがおっしゃっているように、「学」の中に「楽」を入れていこうというのは、多分、共通した考えだろうと思います。それを持続させていく方法となりますと、やっぱり、アカデミズムを切り捨てて学は成立しないわけです。だから、アカデミズムと、そこにいる人たちとの対話をどうやって深めていくかというところが、一つ問題だと思います。

ライフワークを持っている個人には、その発表の場が欲しいのです。きちんと評価されたり、取り上げられたりすることが大切です。個人の研究者が、何か新しい観点から蘊蓄をかたむけるそうだ、おもしろいから行ってみようという場、九時～五時ではない空間が欲しいのです。

つまり、二十四時間、四六時中、そこは市の施設だけれどもあいている。アトランダムにいつも人が出入りしている。そこには、必要な人間がいる。必要な文献がある。しかし、二十四時間あいていますというぐらいの思い切った政策を打ち出さないと、私はつまらない援助、規制をしていただかない方がよろしい。当初はつらくとも自分たちが一歩、二歩前に出ていく、自助の努力といいますか、そういう方向だと思います。

だから、ほんとにお考えいただくならば、横浜学のベース・キャンプともなりうる自由なスペースがまず欲しい。そこでは横浜のことなら森羅万象、ありとあらゆることが絶えず研究や討論がなされるところ、成果や結果が蓄積される場であって欲しい。

横浜学のベース・キャンプは、横浜人一人ひとりがさまざまなスタイルで、横浜を楽しむ方法を身につける場となり、同時にコミュニティー・カレッジの役割を担う場ともなりうる。横浜に興味・関心をもつすべての人々に「横浜学」の実りを発信できるベースになることを願っています。

文化の二十四時間都市を

中村　原三溪富太郎が三溪園をつくったときにあれを二十四時間開放したのですね。今から八十年も前に、そういうことを既に考えていたわけです。三溪園は当時原さんの私庭です。私庭に夜中に他人が入ってきても、それをウエル・カムとした当時の原さんの偉さというのは、すばらしいの一語につきる。異論もあるかもしれないが、今つまりあれから何十年かの後に、全

く彼の思想は継承されていないですね。これは非常に残念なことです。東京が金融中心都市となって、銀行と証券のために二十四時間動くようになるそうですけれども、横浜はそういうことでなく、「文化の二十四時間都市」を目指したらどうか。かつて横浜が、世界への窓口の一つで外国文化を流入させたという意味からみても大事な役割ではないか。百年後、あるいは百三十年後にやっとその辺に気がついたという意味では、来年あたりの一つの目玉ではないかな。昨今、東京の二十四時間都市化ということがもてはやされていますが、どうも、それは限られた産業、限られた業種での話のようです。もっと広い意味での二十四時間都市というのはどのようなものなのか。その辺を考えなければいけない時期に、あるいはきているのかもしれません。

最後に、佐藤先生と、加藤先生から、それぞれおまとめをいただきたいと思います。

佐藤　まとめというか、二点だけつけ足しておきますと、二十四時間開放空間に近いものを十年くらい前、私の自宅で実施していました。

中村　ほう。すごい。

佐藤　私は四十五平方メートルしかない公務員宿舎に住んでいましたが、ちょうど仕事が終わって、夜十一時ぐらいに来る方が、明け方四時、五時ぐらいまで、談笑していった。そのころは、その二ＤＫの団地をサロン・ド・サトーと呼びまして（笑）やった覚えがあります。もちろん、ほかの仲間も、家庭を開放できる方はする。

現在は、先ほどお話したように、もうちょっと広いところをコミュニティー・サロンと称しています。そこで、一月八万円の家賃を払いながら、全体の改造費四百万円以上かけましたが、その借金がほとんど返せておりません（笑）。今、三年目で、いつまで続くかわかりませんが、一人十万円ずつの組合員を募集しまして、二十人足らずの仲間が集まって、それを拠出金として始めました。そこで真っ先に考えたことは、それを行政や何かに頼らないことでした。頼っても無理でしょうけれども、どうしても、行政の立場ですと管理ということがありますからね。みんなが鍵を持っているところでなければ意味がないのだということが出発点です。ですから、我々は、まず場の確保をしてから、ほかのことを考えました。

ニューアカデミズムとの結合

佐藤　二点目に、先ほど鈴木さんがアカデミズムとの結合ということをおっしゃいました。私なりに一言つけ足せば、「ニューアカデミズム」と言っていただきたい（笑）。それは、こういう意味です。つまりコミュニケーション論というのを大学で教えている人が、隣の奥さんと会ったときには、どういう話をしていいかわからない（笑）とか、教育学の先生が、一度も自分の子供の学校のＰＴＡなり、授業参観に行っていないという例があるとします。それはこれからのアカデミズムではないと思います。

逆にいうと、私が一緒に楽しみたいと思う仲間はそういう人ではありません。自分は専門家だから、子供の学校のＰＴＡになぞ出られるかというような人ではない人と、一緒に楽しみたいというのが、私の気持ちです。

四――横浜学は横浜の財産を生かして

中村　初期の横浜という土地はどちらかといえば、アカデミズムの追求者ばかりではありません。むしろ知識や技術はさておき、とにかくフロンティア精神に燃えに燃えた人が集まってきた歴史がある。

それこそ外国人の顔もわからなければ、言葉もわからない。商売の習慣もわからないで、風呂敷包み一つでやってきたという、百三十年前はそういう人が多かった。戦後もかなり情報や知識は普及したけれども、やはりふるさとから

横浜へ出てくるということは、かなりの冒険といえますね。そういう人たちが多かった。私はそれがニューアカデミズムと直接結びつくかどうかよくは分かりませんが、フロンティア精神に富んだ人たちが多いところだから、誰かが、そういう仕掛けを少し上手にしてあげると、意外に「この指たかれ」で大勢の人たちが集まってくるような気がしないこともない。

むしろ、今のように、横浜をふるさととする人が育ってくると、案外フロンティア精神の発見や涵養は難しくなるかもしれませんね。ですからへたをすると〝偉大なる地方〟になるかもしれない。その方が、私は若干恐しいような気もいたしますが、できれば加藤先生に、その辺についてのお考えをお願いします。

都市に文化をプラス

加藤　外から見る横浜のイメージは、学生に聞いてみると、一つが「明るい」と言うのです。もう一つは「因習にこだわらない」という。それは横浜以外の人の横浜イメージですが、これは大変な財産だと思います。

さっきも都市とか、ふるさとということが出ましたが、「都市」という漢字の二つのつながりが生まれたのは、実は明治になってからで、「都」と「マーケット」の結合です。「都」というのは「政治」が中心で、「市場」は「経済」の中心ということでできて、あの時点では確かに大変おもしろい造語だったと思います。

というのは、日本の都市をものすごく乱暴に三つに分けると、一個しか「都」がなかった時期、「古都」がずっとあって、鎌倉幕府以降、二つ目の中心ができて、それが全国に城下町、門前町みたいな格好でふくらんだのは近世ですよね。

今の県庁所在地初め多くの都市というのは、大体「中都」の延長です。中世、近世の生まれたものの膨張で出来ていて、最後に「近都」というか、新しい都として二つのタイプがそこに加わったわけです。一つが条約による開港場、つまり横浜や神戸など、もう一つが企業城下町という工業都市です。そういう形できて、明治に「都市」という言葉が生まれたときは、まさにその状況で、ぴったりだったろうと思います。ところが、これからは少し違ってくる。都市にとっては、住んでいる楽しさといいますか、文化といってもいいかと思いますが、その文化がどういうふうに機軸になっていくか、あるいは機軸にならないまでも、大きくなっていくかが勝負だろうと思います。

その意味では横浜が急に人口が増えたというのは、因習にとらわれなくて、来やすかったという面もある。

それが今三百十万人台。その大部分は、二つの「ふるさと」つまり、自分の生まれ育ったところと、横浜との二つの「ふるさと」を持っている人たちです。つまり、相対化できるものを持っているわけですけれども、だんだん横浜生まれ、横浜育ちが増えていくと、因習にとらわれないという一種の気風が、どうなるのか。放っておくと、かなり閉塞状態になるとすれば、そこにどういうボールを投げて、最終的には魅力ある町にすればいいのでしょうか。私たちのアカデミズムでいうと、横浜学派みたいなものが二十一世紀ぐらいには、ぽつぽつできてくるのでしょうか。もうちょっと早くできますかね（笑）。

横浜を「都会」に

中村　是非実現したいと思います。

私は、加藤先生のお話を伺っていて、古都、中都、そして近都、新都という分類を新鮮に感じました。政（まつりごと）を行う都（ミヤコ）と、マーケットとしての市（イチ）、つまり経済です、この政治と経済が結びついた地点あるいは機能が、日本の都市だったのだと思う。横浜の場合は、もちろん横浜市という面では「政」もあるのですけれども、横浜の人たちは、あま

り行政という機能あるいは機関に頼らないというのが、横浜人のこだわりのない面の一つではないかと思う。

そうすると、横浜はむしろ、このごろあまり使われない言葉ですが「都市」ではなくて「都会」という言葉で呼んだほうがぴったりするのではないか。「会」というのも、頑張る人は「会社の会だ」というかもしれませんが。「出会い」とか、「集まる」という意味で横浜は都会だと。行政や法律用語では都市でもいいですが、これから横浜学を進めていくような人々は、横浜は都会だという感じをもってはどうか。それは「田舎」と「都市」というような対比ではなくて、人々が集まり、いろいろな機能が集まる。もちろん、「行政」と「市民」との出会いもいいと思います。とにかく出会う、そして出会ったものを大切にしたい。「会」というのは、何かと丸くおさめるというような意味もあるようです。「会釈」などという表現も語源はよく分かりませんが、多分仏教用語かもしれません。何となくソフトに進んでいく時代に、二十一世紀に向かって、いわゆる横浜らしさというものを出していく。

そのために、いろいろなグループがあり、塾があり、場合によれば、お互い同士の切磋琢磨というようなことでやってみるのもいい。横浜が市政百年を迎えるに当たって、「横浜の百人」というのを広くいろいろなグループに挙げてもらうと、横浜のイメージがどういうものかが分かるのではないかと思う。つまり、意識が行政に傾斜している人は、政治家の名が出てくるかもしれないし、港や船の関係だけでなくいろいろの面の人がでてくるでしょう。「横浜の百人」を『調査季報』の最後ぐらいに募集して、一〇〇号では無理ですから、一〇二号か一〇三号で発表すると、今の横浜の人たちが、一体何を横浜に求めたり、あるいは感じたりしているのかということが、少し浮き彫りになるのではないかなという気もします。

今日は、恐らく、行政当局も予想していなかったようなご提案、あるいは考え方が出されたのではないかと思います。これには行政当局もいろいろ準備をしていただいていますが、他の座談会にまさるとも劣らぬ何かが描かれているのではなかろうかと自負しています。

大変貴重なお時間をちょうだいいたしましたが、この辺で、今日の座談会を巻き揚げさせていただきます。これを契機にそれぞれ情報交換やら、またそれぞれからのアッピールなどもしていくようにして進めていきたい。そうすれば、今日限りということでなくて、今日が、むしろ出発点ということで、横浜論、あるいは横浜学というものが先に向かって一層発展していくでしょうし、横浜学派が生まれ、育っていくのではないかと思います。

貴重なご提案・発言、まことにありがとうございました。